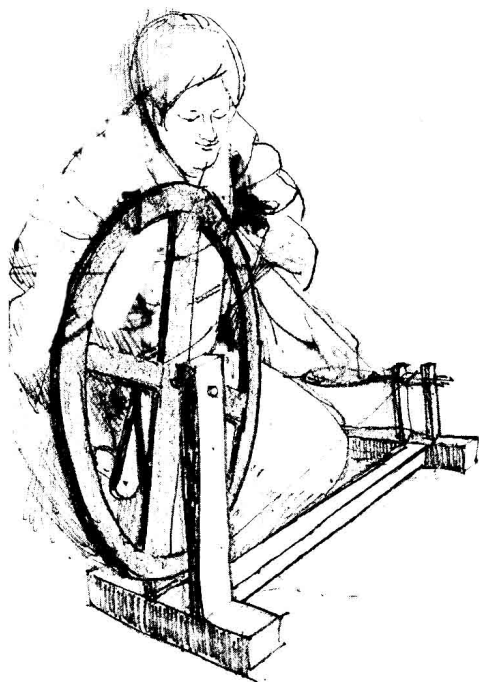


北泉優子
緋の花

講談社刊



紺の花

著者 北泉優子 (きたいずみ まるこ)

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―二二―二
〒一―二 振替 東京 三九三〇
電話 東京(〇三)九四五―二二―二(大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社若林製本工場

第一刷発行 昭和五十年四月四日
第二刷発行 昭和五十一年四月四日

©北泉優子 昭和五十年 落丁本・乱丁本はお取り替えます。

定価はカバーに表示してあります。 (文2)

紺の花
目次

嵐	紺	風	波	霧	霰	炎	緑	雪
の	の	の	の	の	の	の	の	の
章	章	章	章	章	章	章	章	章

145	127	112	96	77	60	41	23	7
-----	-----	-----	----	----	----	----	----	---

雨 紅 幻 悲 命 水 華 藍 砂
の の の の の の の の の
章 章 章 章 章 章 章 章 章

324 299 276 258 240 222 201 182 165

装丁
大野
隆

絣
の
花

雪の章

登紀は十六歳の時牛ノ戸へ行つた。昭和二十年十二月中旬のことである。

登紀が発つ朝、見納めになるかもしれない境の町は、未明から降りはじめた淡雪で、ほんのりと薄化粧をしていた。ひくくたれこめた灰色の空からは、やむ気配もなく、雪の花が舞いおりてくる。ぼつてりと水分を含んだ大輪の花であつた。

「思い立ったが吉日。雪は捕って喰いやせんけん、はよう仕度をしてごせ」

雪を口実に行き渋る登紀を、祖母は容赦しなかつた。容赦しなかつたが、どこでどう工面したのか、真新しい臙脂のべっちゃん足袋と、赤い鼻緒の駒下駄を揃えてくれた。

その足袋と下駄をはき、登紀は祖母とともに、生れ育つた露地裏の家を出た。

境港の駅までは遠い。背を丸め、小走りに急ぐ祖母の後を、登紀は小さな蛇の目傘をさし、その傘で顔を隠して従つた。藍染めの絵紵の着物に赤い帯、足袋と同じ色の肩かけ、柳行李ひとつさげた彼女は、ひとり旅へ出すさえ心痛むほど少女じみて見えた。しかし、前に行く祖母は、つかの間の旅路

ではなく、今宵からは他家の飯を食う女中奉公に出るというのに、辛かろうとも達者で暮せとも、優しい言葉は吐かなかった。

「なにしとる。急がんと遅れるけん」

下駄も足袋も降る雪に濡れた。傘も重い。登紀の足は凍りついて、ひと足ごとに歩みも鈍った。それを、無情にも祖母は叱った。

傘にうつすらつもった雪を傾けて落し、登紀はきつと面をあげた。あげた顔は、頬そめる紅の色こそなかったが、際立つ美しさで、息を吞むばかりであった。整った目鼻立ちもさることながら、白磁に輝く広い額の下の瞳は、強い意志をひめて、この娘の並々ならぬ聡明さと性根を露わにしていた。登紀は眉をあげたままで、再び歩き出した。

境の町はまだ眠っている。二人は子犬一匹通らぬ朝の道を、さくさくと雪を踏んで駅へと急いだ。しんと静まりかえった町筋に、足音だけが響いた。

境港駅に近い小さな石の橋の畔^{なもと}まで来かかった時、ふいにぼうぼうと汽笛が鳴った。すぐ左手はもう船着場である。誘われて、登紀は不覚にもしゃくりあげた。ぎくつと立ち止まった祖母は、それでもふり返ろうとはせず、突き放すように歩をはやめた。

寡黙だった祖母が重い口を開いたのは、停車中の列車に乗りこむまぎわであった。

「牛ノ戸へ行ったら、遠慮せんと食ベンさい。うんと喰って、うんと働いて、可愛がってもらえ。今日から、お前の家は牛ノ戸やけん」

風呂敷包みを手渡しながら、祖母は鼻みずを啜った。

「ほな、行つてきます」

「死んでも戻ってくることはならんぞ。あげなおつかあのおる家^{うち}げは地獄じゃ」

ふりかかる雪を払うそぶりで涙を隠した祖母は、座席に座る登紀を見届けると、荒れた手をふつとあげ、ゆっくり彼女の視野から消えた。

登紀は動きはじめた列車の窓に顔をくっつけ、ふりしきる雪のホームに立つ祖母の姿を、いつまでも追った。

境港は三方を海に囲まれた港町である。美保湾と中海に挟まれて弓状に細長くしなる弓浜半島の突端にあつて、島根半島と向かい合っている。

境町と呼ばれた昔から、この町は潮と魚の香で充ちていた。日本海側を代表する良港のひとつに数えられ、貿易船の出入港、隠岐への定期船の発着と、漁業以外の船舶の往来も多かったけれど、やはり主力は漁業である。町の人々もその大部分は、あるいは船に乗り、あるいは水揚げ場や加工場で働き、あるいは造船場へ通うといったふうに、漁業とかかわり合いを持って生きてきた。女たちもそうである。

境の女たちは働き者だった。男たちが海に出た後の家庭を守り、子供を育て、自らも魚を相手の職場で働く。三時、四時というまだ夜明け前の時間に起床し、彼女たちは岸壁に立ち並ぶ水揚げ場へと出かけていった。黒髪をきりりとおおった手ぬぐい、紺のもんぺに純白の前かけ、そして脛をすっぱり隠すゴム長。それが港で働く女たちの制服だった。

登紀がそんな女達に混じって働き出したのは、十三歳の時からであった。高等科や女学校へ通学する同じ年ごろの娘なら、まだ暖かい布団のなかでぬくぬくと安眠を貪っている時刻に起き、明けの明星が輝く薄暗い道を、海岸を指して駆けていく。

「ほんに、登紀ちゃんはお働き者だら」

「あげなこまい身体やけん、きついだろうがなあ」

「だけん、あの娘は性根がちがう。いまにがいなことするぞ」

登紀の仕事は、魚の箱詰を手伝うことだった。がっしりと骨太の女たちの多いなかで、彼女は小柄ゆえに、逆に目立った。目立ったのにはもうひとつ理由がある。その少女とは思えぬほどの際立つ美貌だ。体格も動作も、そのまま小学校へ舞い戻ってもおかしくないほど稚ないのに、顔だけが凛として、近より難い気品を整えていた。日毎、その美貌を冴えさせていく彼女を眺めて、働く女たちとはとんびが鷹を生んだと陰口をいい合った。

登紀の父親は巾着船の漁師だった。母親はやはり水揚げ場で働いていた女である。庭木の二、三本のある家に住んではいるが、場所は露地の奥だ。たてつけの悪い格子戸を開け、つるべの垂れる井戸端をすり抜けて通ってくる娘とは、とても思えなかったからであらう。

登紀はよく男たちからかわれた。戦時下とあって若い男こそ姿を消していたが、港で働く男も、船に乗る男も、彼女が通ると、ひゅつと口笛を吹いたり、いい女だと声高に噂したりする。そんな時、登紀はいつも、強い光を放つ大きな瞳で、きつと見据えた。性根が違うと囁かれるのも、その毅然とした態度を覗き見られたせいかもしれない。

登紀は利発な娘だった。そうでなければ、ほんの子供の分際で、浜の女たちに混じって働いては行かなかった。足手まといにもならず、誰彼なく可愛がられ、庇ってもらえるのも、目から鼻へぬける利口さにあった。しかし、彼女は無口だった。問われれば的をはずさぬ受けこたえはするけれども、小賢しげに媚をふりまいたり、顔色を窺ったりは決してしなかった。いつでも、隅の方でひっそりと控え、呼ばれると、はいと涼しい声を出した。

魚の箱詰は重労働である。内に激しい気性を秘めていても、性根や根性だけでは耐えられない。小柄でひ弱な彼女は、空腹も重なって、たびたび倒れた。倒れた登紀をひょいと抱えあげ送り届けるごとに、監督格の男は勧めた。

「ばあちゃんよ、どこぞ安気な奉公へ出せや。こげな娘に力仕事は無理やけん」

登紀ほどの娘なら、どんな邸でも立派に勤まる。彼はそういったが、祖母は首を縦には振らなかった。

そして、三年が経った。登紀から父親を奪った戦争はようやく終ったが、かわりに、極端な食糧難、飢餓地獄が待っていた。彼女の倒れる回数も増した。それでも、祖母は転職しろとはいわなかった。ぶんと魚のくさい臭いをさせて戻ってくる血色の悪い顔を眺めて、深々とため息をつくだけだった。

その祖母が、突然、何を考えたか、牛ノ戸へ行けと命じた。終戦の年も師走に入った月初めのことである。しんしんと底冷えのする寒い晩であった。話があると呼んだ祖母は、火鉢に消し炭を足したり、喰えやと乾しいもを戸棚から出してきたりして、中々切り出さなかった。襖ひとつ隔てた隣室で

は、母の佐和が、引きずり込んだ特攻あがりの闇屋とふざけている。洩れる母の声は甘く媚びて、思春期の登紀にも、その暗闇の中での行為を容易に想像させた。母の声がとつもない呻きに変化した時、祖母が弾き返す強い語調でこういった。

「登紀や、牛ノ戸へ行きンさい。仕事はちつときついけれど、飯だけはたらふく喰わせてもらえ約束じゃけん。こげな家にいて、だらなおつかあと暮すよりや、なんぼかましじや。あげなおつかあはお前の親じゃあらせん。お前のおつかあは、おとうや兄ちゃんと一緒に戦争で殺されたと思え」

終戦の日まで、佐和は夫を御国に奉じた誉れの家の女主人おんなあるじにふさわしい貞淑で気丈な女であった。

惚れて結婚した夫の戦死公報を手にしても、顔色ひとつ変えず、立派にお役に立てて本望だと挨拶し、周囲の涙を誘った。二十年四月、境港に停泊していた軍用船玉栄丸の爆発事故の巻添えで、亡夫に生き写しの息子を失った時も泣き崩れこそしたが、ぶざまに取り乱したりはしなかった。それが終戦の日を境に狂ったのである。夫を返せ子供を返せと泣き暮し、ぶいと港へ出ては見知らぬ男を連れて戻った。次々と変る男は、いずれもどこか死んだ二人に似た雰囲気を持っていた。いま隣室にいる若い男も、そんな一人だった。男はもう半月余も入りびたっている。母とふたり部屋へこもりっ切りで、食事時ぐらいいしか顔を合わせないが、初対面るとき、登紀があつと声を発したほどドンで死んだ兄に酷似していた。

「まんどこまいお前には酷だけんど、行ってごしなはい。後生だけん」

薄いが親類筋に当る家だから、全くの赤の他人というわけではない。しかも、子のない小杉家は、事と次第によっては養女にとほめかしていると祖母は言葉を足した。

「ばあちゃんの織った重たい緋のもんべ穿いて、百姓仕事したり、水揚げ場で魚の箱詰手伝うとるより、可愛げにふるまって、分限者の娘にしてもらえ。袂の長い絹の着物着られる身分に出世せえや、なあ登記よ」

「ほんとに腹いっぱい喰えるだか？ 赤い洋服も着られるだか？」

「ああ。みんなお前の働き次第じゃ」

「ほな行く。行って働くけん」

「そうしてごせや。だらず者のおつかあに未練残しちゃいけんぞ。おつかあは、ばあちゃんが背負うけん、うらに任せるだよ」

こくんと登記は頷いた。頷きながら彼女は、花模様を着て銀飯を食べる己を夢想した。天国じゃ。別天地じゃ。そう思うと、肉親との別離の辛さなど、ものの見事にふっとんだ。

至極簡単に承知した孫に、肩の荷を下ろした祖母は、しばらくの間簞笥の奥をごそごそさせていた。やがて彼女は、小ぎれいに洗濯し仕立てあげた緋の上着と対のもんべをばらりと拡げた。

「なに？」

「触ってごせや」

ほのかに古ぼけた匂いを放つ木綿地は、しなやかで、どきんとするほど暖かった。

「あったかい」

「判るか？ これが、弓浜の女の性根しやねじゃぞ」

「性根？」

「弓浜の紺は売り機^{ばた}じゃないけ。錢稼ぐために織るんやないけん。着る人は織る前から決まっとるけ。その人が、亭主だらアが子供だらアが、着てごしなはる人への、私の氣持全部こめて織るんじゃ。織る時だけじゃないぞ。糸紡ぐときも、絵柄選ぶときも、どうぞ、私の心伝えてごしなはいと祈り続けるんやけん。だけん、こげにいつまでも暖かいんじゃ」

「うん」

「登紀や、こげな紺のような、やわらかい、暖かい女になれや。私のほかは、みんな糸やと思え。真心尽せば、糸は決して裏切らんけん」

祖母は、自分のために母親が織ってくれたという、紺地にくっきりと白い麻の葉が浮き出た紺の上を、形見だといって膝元に押しつけた。形見の意味を深く詮索する知恵も涌かず、登紀は手持ちの衣裳が増えたことにただ満足していた。

翌日、彼女は母親を掴まえ得意げに報告した。牛ノ戸へ奉公に出る。そいだけん呉れた。邪氣のな娘の話に耳を貸さず、佐和はぶいと横をむいて、男に食べさせるのであろう、なけなしの白米を研いでいた。

登紀の出立する前日、それまで一片の関心も示さなかった佐和が、姑と娘の前にどすんと布袋を投げた。

「赤飯炊いてごしなはい。わたしの値打ちは、小豆三合だけんね」

無表情に吐き捨てた佐和は、醜く顔を歪めた。

「佐和、お前^{めえ}、パン助の真似しただか！」